研究発表会の振り返り

第３学年体育科「シュートボールをしよう」

授業者　湊本祐也

本実践の主張点

シュートボールにおいて，ゲーム中の自分や友達の動きを撮影した動画を視聴し振り返りを行うことで，省察性を働かせながら自分や自分のチームの運動の改善につなげることができ，探究の質が高まるだろう。

１．授業づくりの「しかけ」と子どもの探究

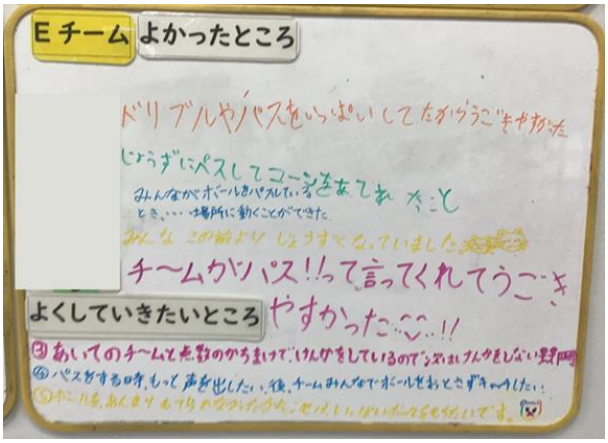
本時における授業づくりの「しかけ」

シュートボールの練習試合の後に，グループでゲームの動画を観て振り返る場面。



ゲーム後に撮影した動画をグループで観て，気が付いたことを話し合う場面では，「○○さんのパスが，○○さんに繋がってシュートができた」「うそパス作戦が成功した」などチームの動きを肯定的に捉えるものから，「自分のパスが高すぎて，仲間につながらなかった」「もっと空いている場所に，すぐに動かないといけない」などの改善するための話し合いができている。

しかし，さらに省察性を深めながら振り返りを行うためには，ただ動画を観せるだけでは小学校３年生の発達段階では難しく，教師の介入が不可欠であるように見受けられた。そこでゲームの動画を教師側で分析し「○分○秒にどんなプレーがあったか（そこからどう展開したか)」を整理し，それぞれのグループに見せ，それも振り返りの一つの材料として提示している。一つの授業時間内でこのような支援を行うのは難しいので，別に時間を設けて行うことになるが，このような手立てがあると子どもたちにとっても分かりやすく成果と課題が見えやすい様子が見られた（あらためてグループの振り返りを書きたいというグループもあった)。



２．本時における子どもの評価活動

本時における子どもの評価活動

シュートボールのゲームの動画で，自分や自分のチームの動きを観て，「よかったところ」「よくしていきたいところ」について自己評価・相互評価を行う。

振り返りの場面で注目させたいところを，単元全体の学習の流れの中で段階的に示しつつ，系統性をもって学習を行ってきている。まずはボールの操作に関わる動き（スロー・キャッチ）である。ただし今回の単元では「投の指導」には重点を置かず，ドリル練習や練習試合の実践場面で身につけさせるように指導を行っているので，「ボールを持っていないときの動き」「仲間との連携」などの方により価値づけを行い，子どもたちに伝えている。ボールを持っていないときに，どこに動けば味方からパスがもらえるか，そして味

方と動きながらパス回しをしてシュートの機会を作っていくかというところをシュートボールにおける課題として示し，全員で課題意識を共有しながら学習を進めてきた。３年生では具体的に言語化して伝えることが難しい場面も多かったように感じたが（チーム内の意思疎通の難しさ・運動技能や思考力の差），それでも練習試合を重ねるごとにチームとしての絆を深め，協力しようとする態度的側面の向上が見られている。特に単元の導入部では，まったく動けずボールに触れることができなかった子どもが，動き回り声を出して，仲間とボールをやり取りしている様子は，主体的に学習に取り組む態度につながったと評価できるだろう。

３．本実践を振り返って

本実践では，タブレット PC を用いて動画を撮影し，より有意な振り返りに繋がるようなしかけを講じ実践を行った。しかし，「動画を観て振り返る」という行為が，まだまだ「子どものもの」になっていない（子どもの内発的なものになっていない・明確な運動の改善に繋がっていない）点が多々見受けられ，課題は多い。以前に行った「マット運動」「高跳び」などでは，個人の同じ行動を動画で振り返るのに対し，本実践のようなゲーム型の学習では，同じ状況の場面が生み出される事が稀であり，多くの人数が入り乱れる流動的な展開の中で運動を振り返ることは容易なことではない。動画を観て振り返りをすることに価値を見出していくためには，撮影の方法を工夫する（より局所的に・見やすくする）ような工夫や，振り返りの視点をより焦点化して提示するなどの工夫が必要だと考える。また，体育科授業におけるタブレット PC の活用も，その使用自体が目的にならないように十分配慮し，子どもたちが自分で選んだ学習方法の中に，タブレット PC の活用があるというような手立てが必要であると考える。

近年ではスマートフォンやタブレット PC の急速的な普及により，子どもたちにとって様々な場面で動画を視聴する機会というのは増えてきている現状がある。そのような子どもの状況を鑑みて，安易に考えもなくタブレット PC の活用を学習の取り入れることは，必ずしも子どもの学びに繋がるわけではないことを十分意識し，慎重に活用法について今後も検討を行っていきたい。子どもたち自身は動画を撮影したり視聴したりすることに慣れ親しみ，楽しい様子である。その楽しさが有意な振り返りに繋がっていくためのしかけを，さらに研究していく必要があるだろう。



